



地図で読み解く 日本の地域変貌

平岡昭利 編

B5判 338頁

発行 海青社 2008年11月

3,048円+税

1枚の地図には数多くの情報が詰め込まれているが、自分が知りたい情報を取り出し、読み解くということは非常に難しい。加えて、理解をより深めるためには、地図から得られる情報と現地を実際に歩くことにより得られる情報との両方が必要となってくる。

本書は日本全国から111か所の地域を取り上げ、新旧地形図を掲載し、その地域をフィールドとする地理研究者がその地域の歴史的変化と特徴について解説する構成になっているため、解説を辿りながら地形図の中にある情報を読み解くことができる。

本書の編者は古今書院から出版されている『地図で読む百年』シリーズの編者でもあり、本書はこのシリーズのダイジェスト版かつ改訂版といった感がある。

取り上げられた地域はさらに厳選され、解説も街全体の概観を中心とする構成となっており、ここ数年の開発により生じた都心部および郊外の変化もかなり多く追加されている。また、国土地理院発行の地形図の図式が大幅に変更されたこともあり、前シリーズで掲載された地形図もかなり入れ替わっている。

取り上げられている地域は、各地方を代表する主要都市はもちろん、村落や都市の発達過程を学ぶ上で典型的な事例としてよく取り上げられる地域が選定されている。加えて、地形学的に注目されてる代表的な地域もいくつか取り上げられており、村落・都市からの視点だけでなく、自然を取り巻く環境の変化についても知ることができる。

高等学校の地理教科書や入試でもよく取り上げられる地域が沢山含まれており、地形図の読図の授業準備に大変役立つし、小中学校の社会科には、「身近な地域の調査」という学習項目があるが、地域調査時や授業前に教員が概観を把握する助けになるだろう。

本書の巻頭で、「考える地理」への基本的書物であると編者は述べている。これは現在の地理教育においても重視されている事項でもある。実際に現地を訪れることが難しくなっている教員にとっても心強い1冊である。

また、社会科教員や地理に興味を持つものでなくても、自分の住む街を含めて多くの街の発達過程を知る



ことは、歴史を知ることと共に、将来の街作りを考える上で大切なことではないかと思う。

私の住む「仙台」の項では、城下町時代の道路と街区についての解説に始まり、明治時代以降の鉄道整備、都市の外縁的拡大と工業化、戦時中の軍事都市化、戦後の戦災を受けた中心市街地での土地整理区画事業と道路の拡幅、60年代からの周辺丘陵地でのニュータウン造成、バイパス整備、その後の支店経済としての機能の強化とオフィスビルの集積、中心部での再開発とマンション建設、地下鉄東西線建設と新たな区画整備事業など、仙台の発展過程をよく知ることができる。

また、解説と新旧地形図を見比べることにより、現在のメイン通りである「青葉通り」が戦災復興で整備されたもので、その脇にある細い通りが城と城下を結ぶ昔のメイン通りだったことが読み取れる。「青葉通り」という変哲もない名称や細い通りが直線状でメインの「青葉通り」が迂回している原因がわかる。

これらの項目は高校や大学の一般教養の授業で扱われるような内容が中心であり、地域に長年住んでいたり地理に興味をもつ者であれば、当然知っておくべきことも多く含まれるが、論文や専門書にあたっても都市全体について述べているものは少なく、実際に自分で調べるとなると意外と難しい。専門的に学びたい場合にはもう少し詳しい記載が必要であるが、前述の目的には最適だろう。

もちろん、その街を初めて訪れる時に本書を参考にしながら街歩きをするのもいいだろう。時間ができたら本書を持って、旅に出かけたいと思う。

(宮城県・尚絅学院高等学校教諭 松宮 正樹)